



富んだ国と貧しい国

行政管理庁 美濃部 亮吉
統計基準部長

私は終戦後外国へ六度行きました。最初にヨーロッパに行ったのが昭和24年の9月でしたから、約5年半に六度行ったこととなります。回数でいえば相当多いといえるでしょう。行った国のおもなものは、スイス、イタリー、イギリス、インド、ビルマ、アメリカ、カナダ等でした。外国へ行った回数は割合に多いのですけれど、何しろ会議に出席するのが目的で、会議は長くて10数日つづくだけですから、ほんとうの旅行者で、行った国の国民のくらし等について深い知識を得られようはずありません。それですから、これからお話しすることにも、いろいろのまちがいや考えちがいもあるでしょうが、そういう点があつたらどうぞおゆるしをねがいます。

最初に外国に行ったのは、昭和24年の9月のことで、行きさきはスイスでした。昭和24年といえば、日本の生活事情はまだまだずい分と悪いものでした。パンの色もどす黒かつたし、お砂糖も自由には手に入らず、バターやチーズも進駐軍のものしかなく、コーヒーなどもたまにしか飲めませんでした。ノースウエストの飛行機に乗って、まず驚いたのは、食事の豪華なことでした。まつ白いパン、ふんだんにくれる砂糖、舌のとうけるほど甘いマーマレード、いくらでもお代りしてくれるかおりのよいコーヒー、その時の私にとつてはほんとうに夢のような気がしました。それにつれて飛行機のなかの食事にも段々感激をおぼえなくなつて来ました。何しろ不完全なせまい飛行機のなかのギンで料理するのですからそんなによいお料理ができようはずがありません。このころでは、料理の味が悪いとか、冷凍で肉がまずいとか思うようになりました。それも、日本の食生活が昭和24年以来急速に改善されたからだと思えます。

昭和24年のそんな日本から、一足飛びにスイスに行ったのですから、スイスはまるでこの世のものとも思われず、まるで天国に迷いこんだような気がしました。或る日、一所に行った友達と町を散歩していました。スイスの首府ベルンでは、こんなことがありました。そのうちにベルンをつらぬいて流れている美しい河のほとりに出たのです。その河に渡されたこれもえのように美しい橋の上から下を眺めると、その河のほとりに、相当古びてはいるけれども、よく手入れがとどき、まどには花などがならべてあるアパートが目に入りました。戦争中か戦後に建てられたと思われる近代的な豪華なアパートにく

らればくらくらべものにならないおそまつですが、当時の東京のすまいにくらべれば、これ又くらくらべものにならないほどりつばなものでした。私達は、東京に帰つたらこのくらいの家には住みたいものだ話し合いました。それから2、3日にして、会議も一段落つき、どこかに見物に行こうかと相談していた時、スイスにだつて貧民くつはあるだろう、一つスイスの貧民くつを見に行こうではないかということになりました。早速ホテルの人にきいて見ますと、ベルンにもたしかに貧民くつがあるそうです。そこで、そこに行く道順を教わつて出かけました。教えられた通りに行くと、教えられた貧民くつに出ました。

ところが何んとそこは先日、橋の上から眺めながら、東京へ帰つたらせめてこのくらいの家には住みたいと話し合つたその家ではありませんか。私達は、顔を見合せてにが笑いをするよりほか仕方ありませんでした。スイスは、世界で国民の生活水準が三番目に高い国です。そして、貧富の懸隔が非常に小さい国なのです。それにしても、まことに羨しい国だと思いました。

イタリーのローマに行きますと、スイスにくらべると国民の生活程度がずつと低いことがすぐ感じられます。日本と同じように、棒の先にくぎをつけて、道ばたにすてられた煙草のすいがらをひろつているおじいさんを見かけます。ヨーロッパで、すいがらを拾っているおじいさんがうろざうろしているところはほとんどないでしょう。ローマの町を歩いていると、よたもの風の若い男がパーカーの万年筆を買わないかとそばによつてくるので思わずギョツとすることがあります。しかし、一般の国民の生活程度が日本より高いことはたしかであるようです。ローマは御承知のように、世界のうちでも、もつとも美しい都会の一つだともいえるでしょう。それにもかかわらず、ローマは、世界のうちでも、もつともやかましい都会の一つだといえそうです。

日本のように、ラジオがガーガーなつたり、ひつきりなしに自動車の警笛が耳に入るのでやかましいのではありません。日本にもあるあのスクーターが、ほとんど無数に走つていて、それがたえがたい騒音を発するので、ホテルで通りに面した室でも取ろうものなら、到底安眠などできるものではありません。このスクーターは一般のサラリーマンがもつていて、役所や会社に通うの

に使っているのです。日曜日は、恋人がおくさんをつけて郊外に遊びにでかけます。ローマの中産階級は、アメリカやスイスのように、自動車ももてるほどゆうふくではないようです。しかし、サラリーマン達がスクーターを買って乗りまわすことができる所を見ると、日本よりはよほど生活程度が高いといえそうです。

今度は大西洋を渡つて、ローマからアメリカに飛びましよう。アメリカは何といても世界で一番金持ちの国です。国民の生活程度も一般の平均でいえば世界で一番高いといえるでしょう。日本の生活程度と一体どのくらいちがうのでしょうか。私は役人で、行政管理庁という役所の統計基準部長という仕事をしていす。アメリカにも丁度私の役所と同じものがあります。それは大統領府の予算局のなかにあつて、名前も統計基準部といえ、仕事も私の役所の仕事とほとんど同じです。私はそこの人達とは相当親しくしており、ワシントンに行きますと、いつも二日や三日は、その役所の色々な人達の家にとめてもらいます。アメリカの統計基準部の次長をつとめているライリーさんのお家の話しをしてみましょう。統計基準部の次長さんですから、政府部内の位置からいえば部長である私より一つ下だといえます。年配はほぼ私と同じです。その人の家は、ワシントンの郊外の美しい林のなかにあります。家族の使う居間や寝室のほかに、バスとトイレを備えたお客さん用の部屋が二つあります。御主人と奥様は、それぞれ自分の自動車をもつておられます。お女中さんはいませんけれども、台所には、皿洗い機がそなわり、食事のあと始末も造作なくやります。電気冷蔵庫、電気洗たく機、テレビがあることはいうまでもありません。私とほぼ同じくらいの地位にあるアメリカの役人の生活はざつとこんなものです。

統計の数字によりますと、アメリカの平均の生活水準は日本の十倍くらいになっていますが、たしかに、私とライリーさんの生活程度のひらきは十倍くらいありそうです。生活程度はたしかにアメリカの方がずぬけて高いようです。しかし高ければ高いなりに、それを維持してゆくにも費用がかさみ、その生活は苦しく、けつしてそんならしくではないようです。しかし、苦しいにしても、維持してゆこうとする生活の内容が段ちがいのので、生活の程度は、日本とアメリカとは大へんなちがいがあるといわねばなりませんまい。

日本から30時間ほど飛行機にのりますとワシントンに着きます。ワシントンに着いて町を歩いて見ても、それほどちがつた国に来たような感じはしません。羽田から20時間ほどでビルマのラングーンに着き、そこから更に5、6時間でインドのカルカッタに着きます。ビルマもインドも、日本と同じアジアの一國ですし、そこを歩い

ている人達もわれわれと同人種のアジア人です。それなのに、ワシントンに着いた時よりも、ラングーンやカルカッタに着いた時の方がよつぽど外国に来たという感じがします。それには色々な理由があるでしょうが、こういう国々の国民の生活程度があまりにも低いということが、私達にいかにも知らないよその国に来たという感じを抱かせるのではないかと思います。

ビルマやインドでは町の両側に、しかも目抜き通りにさえ、両側にほつたて小屋の突に汚い食べものの屋台店がならび、何んともいえない怪しげな雑物を油でいためています。そこから出て来る異臭が町中にただよっています。はだしの住民達は、うすよごれた布をまとい、屋台店で買った食べものを立ち食いし、遠りよもなくつばをはきすてています。その道路は、いつはいたとも解らぬごみがうづ高くつもり、風が吹くと黄色いごみが空中に舞い上ります。夜ともなると、ほとんどあらゆる道の歩道には、アンベラをしいて、人がゴロゴロとねています。町中が、終戦直後の上野の地下道のような光景だといつても、大していいすぎではないでしょう。たしかに、インドやビルマの人達の生活程度にくらべれば、日本の生活はくらべものにならないほどぜいたくで高級だといえます。

世界の国々の生活程度は、国によつてこんなにもちがいます。世界における貧富には、驚くほどの懸隔があるようです。貧富のちがいがあまり大きいと、この国のなかでも色々むづかしい問題が起ります。世界になかなか平和が訪れない原因の一つは、たしかに、世界の国々の貧富のちがいがあまりにも甚しいことにあるといわなければなりませんまい。

〔注・なおこの原稿は昭和30年1月19日にラジオ東京から放送されたものを収録したものです〕

